

大会、秋は琵琶大会の開催が例となつて居り、本日は鶴翁会長以下役員、門人の単吟、合吟、約百題を展覧盛会であつた。

第七回兼好忌に琵琶献奏

五月二日(日)屋兼好法師の墓所京都双ヶ岡の長泉寺に於て法話「兼好さんに習うこと」長沢普天上人(旭徳会員)のあと中島旭徳女史が法楽琵琶「三十三間堂柳の精」を謹奏して一般参詣者に感銘を与えた。

錦心流中山鳳水演奏会

五月九日(日)屋大阪都島区網島町大阪府私学教育文化会館、後援一水会大阪支部。第二十四回の演奏会で霧の川中島、武田市次、雪晴れ、藤木鳳誠、天目山、田実、奇縁、岡本隆水、伊豆の御難、中山燦水、西郷隆盛、養老駿水、茨木、田実、岡本、中山鳳水、(以下贊助出演)曲垣平九郎、島田旭光、戦艦大和、神戸滝沢水、鞍馬山、近藤登水、稲葉卓水、杭東詠水、小栗栖、小西雨、竜の口、奈良尾山好水、本能寺、木村蓮水、白秀次、豊橋森田紅水、敦盛、小川吟水、舟弁慶、会主中山鳳水。

筑前琵琶演奏会

五月十六日(日)屋東京板橋区栄町板橋区立産業文化会館、主催東京都旭会(有料)。五絃弾業員、娘みゆき、藤巻旭恵、絃旭祐、藤の梅、小林旭恵、絃旭陽、宇治川、岡本旭江、未練西行、関田旭祥、壺坂寺、横山旭季、若き敦盛、初谷旭憲、安宅の関、大西旭千恵、四條殿、籠倉旭珠、絃旭芳、旭洲、北の庄、藤巻旭鴻、秋風故郷山、藤巻旭星、絃旭彰、將軍乃木希典、吉島旭虹、黒田節、汐風乙女、会員、絃旭神、旭祐、小栗栖、古川旭冷。

玉藻の前、石田旭呂、絃旭鴻、那須与市、早川旭苑、対王丸、古川旭神、新撰組、伴旭友、坂本竜馬、内田旭章、壇の浦、林田旭史、大楠公、大津旭英、絃旭鴻、唐人お吉、藤巻旭彰、石童丸、松元旭川、誉れの水馬、藤巻旭陽、栗津の露、会主藤巻旭鴻。

各流派琵琶春季演奏会

五月二十三日(日)屋京都東山仁王門バス停前本妙寺本堂、(薩摩三曲、筑前五曲、錦心流八曲)主催京都琵琶協会。(次号詳報)

洲楓会琵琶詩吟演奏会

五月二十三日(日)屋東京港区麻布十番会館、主催洲楓会本部。(次号詳報)

故松岡旭岡師追悼演奏会

五月二十三日(日)屋神戸下山手兵庫県民会館主催筑前琵琶同会、後援神戸旭会。会員の外山崎旭萃、柴田旭堂、天津旭八千代三女史来賓出演。(次号詳報)

ラヂオ琵琶放送

○：四月二十二日(日)午後三時五分NHK・FM。「盛綱先陣」を水藤五朗氏放送。
○：五月十三日(日)午後三時五分NHK・FM。「小栗栖」を中谷薬水氏放送。
○：五月十五日(日)午後一時NHK・FMお好みを邦楽選「弁慶と義経」で琵琶「五條橋」を平山万佐子女史の外小唄、長唄、義太夫などで、それぞれ関係の歌を放送。

(予告)

○：各流派琵琶名流演奏会 六月五日(日)午前十時大阪東区本町四丁目北御堂津村別院ホ

ール。主催日本琵琶楽協会関西支部。薩摩、筑前、錦心流の名手演奏三十四曲。(有料)○：日本芸術琵琶協会演奏会 六月六日(日)十二時半、東京港区赤坂公会堂。○：辻剛先生追悼演奏会 六月十三日(日)屋東京証券会館、主催日本琵琶楽協会。○：堺大鳥神社薄生祭に琵琶献奏会 六月十三日(日)午後一時、大阪琵琶同好会協賛。○：京都琵琶協会六月定例会 六月二十日(日)午後二時本部平井春嶺会長宅。

おとあ

春は駐け足のように通り過ぎ、すぐそこに夏が見えそうな気分である。すがすがしい新緑を染しんだあと鬱陶しい梅雨期に入ると琵琶器の守りに苦労する。毎年のことながらこればかりは天の配剤で人力ではどうにもならぬ。本紙「予告欄」の拡充についてはどうもお願い申し上げたい。演奏会やラヂオ放送等の場合、前回は開催の日時会場など数ヶ月前から決定している筈であるし、後者は放送局で録音の時点で放送日時を云って呉れる筈だから、要点を事前に当方に御連絡下さらば「予告欄」に掲載してファンの方々に喜んで貰える。毎月月末までにお知らせ頂ければ必ず翌月一日号の「予告欄」を「眠らすことが出来る」。「予告欄」の拡充は常々読者から要望の声があがっている。どうか是非積極的の御協力下さい。

昭和五十七年六月一日発行(非売品) 編集者 植村 寛 社水 565 発行所 京 村 寛 電話 〇六(八七五) 〇三二六番

琵琶 機関紙

京

絃

第三三六号 京絃社

平家の栄華と都落(五)



ばくすい

総司令官維盛は齊藤別当実盛を召して「汝ほどの強弓の精兵、関東には如何ほどあるぞ」とたずねる。実盛は「自分などは問題になりません、まだまだ強い弓取りはいくらも居ります、凡そ大名と云われる者で、精兵をもつこと五百騎以下なるものはありますまい。」と答え、更につけ加えて――

(平家物語)

これを聞いて平家の兵、皆震えたという。かように平家の陣に臆病風が吹いている時、十月十八日の夜、甲斐源氏武田信義、平家の陣のうしろに廻ろうとしたのに驚いて、富士川の水鳥が一時に飛び立った。恐ろしいと思つている枕もとで水鳥が飛び立ったから、敵の夜襲と間違えてわれ先にと逃げ出した。

あまりにあわて騒ぎで、弓取る者は矢を知らず、矢取る者は弓を知らず、我が馬には人乗り、人の馬には我乗り、つなぎたる馬に乗りて馳すれば、株を廻る事限りなし。(平家物語)

源氏が攻めて来た時には、平家の陣宮に留どまて居る者一人も無いという有様であつた。出発した時、維盛の率いた五千余騎はちりぢりになって、京へ帰る時は僅か十騎に過ぎぬ有様であつた。清盛は大いに立腹し「追討使に任命された以上は、一命を君国に捧げた筈で、戦死することは恥ではない、おめめと帰って来るこそ恥辱とすべきだ、途中からどこへでも出て行くがよい、都へ帰って来てはならぬ。」流石歴戦の武将である。

清盛は口では強い事を云うが、氣は折れた富士川の敗走から一ヶ月後には、都を福原に移すのを断念して再び京へかえし、十二月十八日、政事の実権を後白河法皇にかえした。

清盛が独断で都を京から福原へ遷したのは、治承四年六月初めの事で、人々は内心深くこれに反対であつたが、権力者清盛に恐れて己むなく福原に移つたのである。平家物語に「軒を争ひし人の住居、日を経つ、荒れゆき、家々は賀茂川桂川にこぼち入れ、筏に組み浮べ、資材雑具船に積み福原へ運び下す。ただなりに花の都、田舎になるこそ悲しけれ。何者のしわざにやありけん、ふるき都の内裏の柱に、二首の歌をぞ書きつけける。」

百年を 四返りまでに 過ぎ来にし おたぎの里の 荒れや果てなん 咲き出づる 花の都を ふりすてて 風ふくはらの 末ぞ危ふき

とあるのは、よくその状況を写している。その内に八月の中旬、左大将徳大寺実定、旧き都の月を見たさに福原から帰って来た時の様子が、同じく平家物語に見えている。何事も皆変わり果てて、稀に残る家は門前草深くして庭上露茂し。蓬が袖、浅茅が原、鳥の臥し所と荒れ果てて、虫の声々怨みつつ黄菊紫蘭の野辺とぞなりにける。今故郷の名残りとは、近衛河原の大宮ばかりぞましましける。大将其の御所へ参り、(中略)昔今の物語どもし給ひて後、小夜もやうやう更け行けば、旧き都の荒れゆくを、今様にこそ歌はれけれ。

おんなの都(一〇)

落合一誠



淀君(III)

越前北の庄の城主柴田勝家は、賤が岳の合戦に敗れた時、自刃を覚悟した。そして妻のお市に向かつて、そなたは先君信長の妹ゆえ、まさか秀吉も粗略には扱うまい。どうか城を落ちのびてくれと云った。

するとお市は、かつて先夫浅井長政が自刃した時、自分は落ちのびて今日の憂き目を見たのであるから、もうふたたび同じ歎きを繰返そうとは思わない、たとえ浅い縁であろうと、一たん夫婦の契りを結んだ以上、どうか一諸に死なせて頂きたいと願った。

けれど、三人の姫たちを道連れにするのは如何にも残酷である。それにちやちやを頭とする姫たち三人は、浅井長政の子であって、勝家の子ではない。そこで勝家は、家臣を付き添わせて三人の姫を秀吉の陣営へ送り届けることにした。

さいと、柴田殿にお伝えあれ。」と付き添って来た家臣に伝言した。

天正十一年(一五八三)四月二十四日、最後の酒宴に一夜を過ごした柴田勝家は、妻お市の方をはじめ一族、直臣、女官たち八十人打揃って悲壮な自害、城に火を放って越前北の庄はここに落城した。

明かるく晴れ渡った空に向かつて、もうもうと立ち昇る黒煙を眺め、ちやちやは、あの炎の下に母が居るのだと思うと、今こうして安全を保証されたわが身が、寧ろ怨めしい。秀吉は、歎きの姫たちを連れて、やがて戰場を引きあげて行った。

その後、ちやちや達三人が、どこへ預けられ、誰の庇護を受けていたかという、確実な史料は残っていない。しかし信長の弟織田長益に引きとられて、つましい明け暮れを送っていた、というのが事実だと思われる。

やがて、母の美貌を受け継いで、匂うが如き娘盛りとなつていくちやちやを眺めた秀吉は、かつて勝家とお市の方を争ったことがあるだけに、思慕の念を押さえ切れなくなった。秀吉には、正妻ねねの方の外に十六人の側室がある。ねねの方は、秀吉が信長の小者頭を勤めていた頃に迎えた妻だから、俗にいう糟糠の妻で随分苦労もして来たし内助の功も尽くしている。しかし残念なことに、ねねはただ一人の子も生んでいない。つまり、石女(うまずめ)であった。

天下人となつた秀吉は、どうしても後継者が欲しいと、柴田殿にお伝えあれ。」と付き添って来た家臣に伝言した。

が欲しかった。当時の貴族や大名は、正妻の外に側室を置く習慣があつて、子供は多いほどよいとされていた。子沢山でない血筋の絶えてしまう恐れがあつたからである。その上、一夫一婦制が確立していたわけではなく、戸籍があるわけでもなかったから、権力、財力のある者は何人も妻を持ち、無力者は生涯妻をめぐることが出来なかった。

この時代に、天下に並ぶ者なき権力を手にした秀吉が、美女を集めてハレムを形成するのは寧ろ当然の事と云つても過言ではなく、京極高吉の娘松の丸殿、前田利家の娘加賀殿三の丸殿、姫路殿などと、評判の美女たちが秀吉の側室に選ばれている。

しかし、幸か不幸か秀吉の子をほらんだ者は一人も居なかつたので、秀吉には子種がないのだからと、周囲で噂し合つていた。すると、たった一人、秀吉の子をみごもつた側室が現れ出した。ちやちやである。

ちやちやがいつの程から秀吉の寵を受ける身となつたのか、正史は何も語っていない。かつて父を攻め滅ぼし、弟万福丸を惨殺し、養父勝家と母お市を自刃に追いやった憎い秀吉、その仇敵の寝所に侍せねばならぬ身となつたおちやちやの日常は、決して明かるいものであつた筈がない。しかしちやちやは二十二歳にして懐妊した。そして秀吉は五十二歳であつた。

何れにしても学問とはどこまで探求せねばならぬのか、学者とは全く大変な仕事をするものであるとつくづく感じ入つた次第である。ところで我々の琵琶を上述の所説に照合して見ると、当然のことながら芸能が持つていなければならない三つの性格を完備しているから立派な芸能である。又、通常は「音声的表現」と「器乐的表現」の二つで表現するので音楽であるが、雅楽や他の和洋楽器と合奏する場合は「器乐的表現」である。なお最近では「所作的表現」である踊りとタイアップした琵琶もできて、「より複雑な」芸能になりつつある。これは沈滞気味の琵琶を浮上させるためのひとつの試みであり結構

四絃漫筆



島津天嶺

○ 芸能とは

今まで「芸能」という言葉を安易に考え、手軽に使っていたが、学問的にはなかなか難しいことがあるようである。

以下守屋毅氏が日本芸能史(註)という本の中で述べられていることを「孫引き」として、芸能の芸という字はもと「わざ」で才能、学問、技術などを云い、能という字は「あたう」であつて事をなし得る力、ないしはその力の働きの云う、そしてこの二字を組み合わせた「芸能」という熟語には昔は学問、技芸、武術をも包含していた、それが、現在のように歌舞音曲に限られて使用されるようになったのは「院政期に萌芽し南北朝期を明瞭な画期として」起つたとのこと。

又芸能の基本的性格としては「肉体における演技性、時間における一回性、空間における共感性」が必要である、この中の肉体における演技性とは人の持つて「わざ」を人の前で行わなければ芸能といえぬということであり、時間における一回性とは芸能はその時一回限りのもので演劇の一回一回が芸能に

とつては新たな作品である。そして第三の空間における共感性とは一座している者が――演者と観客とが――ある種の共感に貫かれることをいうことである。

芸能は、このような三つの性格を具えているものであるから、茶の湯も芸能の範疇に加えてもよいのではないかと守屋氏は云つておられる。

次に芸能表現の方法として舞とか踊りのように自分の体を使って行うものを「所作的表現」と名づけ、歌とか話芸とか口から出る音で表現するものを「音声的表現」と称する。いうまでもなく「所作的表現」は視覚に、「音声的表現」の方は聴覚につながるものであるが「所作的表現」は更に拡張されて「装置(飾)的表現」が生じ、「音声的表現」の方も同じく口や手足を使って楽器を奏する「器乐的表現」に拡大し、この四つのもので芸能が表現せられる、そして、この中のひとつだけでも例えば「所作的表現」ではパントマイム、又「音声的表現」だけでは話芸のように――芸能を表現できるが、二つ以上が結合すると複雑な芸能ジャンルが構成される。即ち音楽は「音声的表現」と「器乐的表現」の結合であり、演劇はこの四つの方法を併用したものであるということである。

以上は守屋氏の約五十頁にわたる労作を、頭のわるい私が私なりの解釈で要約したものであるから、著者の真意に反しているところがあるかも知れない。

竹下翠風春季演奏会

日時 五十七年六月十三日(日) 午後五時半開場

場所 安田生命ホール(新宿駅西口前)

出演者 竹下翠風(関ヶ原) 吾妻江風(伏見の里) 杉山旗水(会津の華) その他

入場料 三、〇〇〇円

なことであるが、「琵琶は心で歌い、心で聴け」と教えられてきた私には「聴覚的芸能」に「視覚的芸能」が加わることに苦痛を感じることがある。

(註) 芸能史研究会編「日本芸能史」(I)の序論 (I) 芸能とは何か。この執筆者は守屋毅氏 (国立民族学博物館助教授)

沖縄南部戦跡と玉泉洞(上)

辻 旭城



昭和二十年八月の終戦以来、ぜひ沖縄の戦跡を訪ねたいと思っていたが、身辺俗事に追われて今日まで延びてしまった。ところが好期到来、いささか旧聞であるが、昨五十六年三月三日、三泊四日の予定で絃友石橋、矢野辻、田中諸氏をはじめ有志百余名は、南部戦線めぐりと玉泉洞見学の旅に出発した。

第二次世界大戦の戦跡を訪ずれて生命の尊さが身にしみ、玉泉洞に廻れば、そこには自然の素晴らしい芸術に息をのんだ。

エメラルドグリーンに色どられた珊瑚礁の海、どこまでも続く白い砂浜、鮮やかに咲き乱れる熱帯の花、楽しげに肩を寄せ合う新婚カップル……。こんな沖縄を見てみると、この地が激戦地であったとは、とても信じられ

ないほど周囲は明るく、陽気な風土に充ち満ちている。夢が幻か？ しかしここは紛れもない激戦地。目を閉じて当時を顧みると昭和二十年三月から六月までの四ヶ月間、この島を襲った戦争という名の暴力団によって二十数万の同胞を死に至らしめ、美しい南国の大自然を無惨にも破壊してしまった。

戦後既に三十数年、復興に燃える島の人たちはそのエネルギーを結集して、美事に立ち直り力強く生き返ってきた。無惨に壊された自然は歳月が流れて、今では何事もなかったように平和な顔をみせている。

南部地区の糸満町を訪ねた。ここは那覇から南約十二キロ、人口は二万に近く漁業の町である。彼等は先祖から受け継いだ琉球魂にものをいわせ、沖縄全島は勿論、日本近海から遠くは南洋諸島まで漁獲に進出している。"稼ぐに追いつく貧乏なし"。この漁師町には奇麗な文化住宅と本土に負けぬ沖縄美人が目につく。

しかし、南部をはじめ島のあちこちに残された疵跡は、今でも当時の悲惨な様を思いおこさせる。

沖縄には観光地が数多くあるが、欠くことの出来ないのが、"南部戦跡"である。観光パスが最初に案内するのが豊見城にある旧海軍司令部の壕で、小高い丘の上には慰霊塔が建てられ、壕の入口がその直ぐ横から続く。全長千五百五十メートル、深さ三十メートルの地下壕で、現在ではその内二百二十メートル

が発掘復元されている。百二十五段の階段を降りると横穴になる。一本の洞道の左右には作戦室、幕僚室、無線暗号室、司令官室、負傷者手当て室や下士官室などにわかれ、当時の感じがそのままに迫ってくる。爆音がどんな感じでもこの壕の中に響いたことであろう。

この壕が全滅したのは六月十三日の未明、太田実司令官は四千余名の部下とともに、壕内で壮烈な自刃を遂げた。太田中将辞世の歌身はたとえ沖縄の野辺に朽ちるとも守り抜くべし大和島根を。

上 申 書

昭和二十年六月六日 司令官 太田 実 (前略) 一木一草焦土ト化セン、糧食六月一杯ヲ支フルノミナリト謂フ、沖縄県民良ク戦ヘリ、県民ニ対シテ後世特別ノ御高配ヲ賜ランコトヲ……。 (後略)

海軍 次官 殿

太田中将自決のあとも、本土を思う気持で男も女も老いも若きも、民間人の献身的な協力に対する感謝の気持のあったことを、バスガイドの説明で皆胸を打たれる思いがした。豊見城の街を抜け、海の男の町糸満を越えるとき"姫百合の塔"が国道の傍に佇んでいる。小さい自然の鐘乳洞のきわに慰霊の碑が高く聳えて建てられ、各地から訪れる人々の供花が絶えることなく捧げられている。(未完)

五絃閑話

水藤 五朗



子弟

今春、東京の落語界では七人の新しい真打ちを世に出すと云う。七人の平均年齢は三十余歳、修業の年数はほとんどが十年をはるかに越している。

新しく真打ちになったこの人々は、今後は寄席はもとより、その他の舞台に於いても、一人立ちの演者として、自己の舞台を含めた一公演全体の責任を負う立場に座ることになる。寄席の言葉で云えば、トリを取る立場の資格を得たのである。更に判り易く云うならばプロの断家として一人立ちになったのである。

落語界では、今日でもこの様な前座、二ツ目、真打ち、と云う修業段階と、それにそくしたような舞台の約束事が伝承されている。これに対して、同じ寄席の舞台芸である漫才にはそれが無い。漫才の修業は、その多くの場合、一・二年の間は、舞台の呼吸や、芸界の見聞をする為の師匠の抱持がある。がその後、適当なコンビを得て出演をすると、一人立ちである。あとは人気が出るのを待つだけで、それからは実力次第である。最近の漫才ブームなどでも、二十才そこそ

この漫才人が、このブームの中心であったことから、漫才界の修業が、落語界のそれと大きく異なっていることをうかがい知る良い一例でもあった。そしてこの二芸能の修業の相異が芸の形にもあらわれていて、漫才は自由であって、会話の内容、演者の動き等々、時代の波を反映することにその主力が置かれている。即ち、プロの漫才人にとっての修業は前座、二ツ目と云ったルールの決められた約束事ではなくて、全く自由、且つ短期日の修業の上でのデビューと云う、表面楽な道を設けておき乍ら、その実、人気と云う、つかみどころのないものが直ちに求められると同時にコンビの呼吸を図る技術をも要求されると云う舞台での真剣修業なのである。

このような過程の中から新しい人材を育て上げてゆく芸の社会を見る時、今後の琵琶界での人材育成に当たっての一つの指標をくみ取ることが出来ると思う。勿論、これは落語、漫才と云った、寄席の社会からだけでなく、他の芸の分野、更には、スポーツ、学問などの分野からも、多くの指標を得ることは出来る。そして、それらの指標を琵琶界全体の態勢として形作り、人材を育て、ゆかなければ本当の琵琶人を生み出すことは出来ないのではないだろうか。

落語界が、その総意として常に新人の真打ちを作り上げてゆく活動をしているのに対し琵琶界は、そうした態勢での人材育成を行なうことのないまゝである。

子弟の育成と一口に云っても、そこには多くの重大な問題が含まれている。本当の意味での子弟育成がなされない限り、琵琶界の隆盛は望めないことを考えると、今日の琵琶界の危機は、取りも直さず、琵琶界に於ける子弟育成が本当の意味でなされていないことを示しているのではないだろうか。

お弟子さんを持つている琵琶人や、お弟子さんである琵琶人は多い。だが、師であり、弟子である琵琶人は極めて少ないと云える。琵琶会を始めてのぞいた或る箏曲人が、随分琵琶には偉い人でも調子が狂う事が多いですわ!!と云う。よく聞いてみると、雅号を名乗り、紋付きを着て、相当な年輩の人が演じたのだが、全く調子が合っていない上に、先ずお世辞にも巧いとは云えぬ内容であったのにもかかわらず、入場料をもその日は取る会であった、と云うのである。

箏曲に限らず、他の芸の常からすれば、雅号を名乗り、紋付きを着て、ましてや、相当な年令の人々、加えて、入場料を取るとなれば、専門家、プロの集まりで、そうであれば調子が狂うと云うことは考えられないのである。

ところが、多くの出演者がそう云う状況であったから、偉い人でも云々との感想が出たのである。こゝに琵琶会の実状と課題がある。琵琶界が、時代の波に乗り遅れた状況を余儀なくされているのは、この点に何の討論もないからである。琵琶界の総意として改革が

なされてゆかなければならないのでは...

門人を育て、ゆく過程に於いて、単なるお弟子さん欲しさであつたり、月謝至上主義であつたりすれば、真の子弟育成は達成しない許りか、伝承者の養成、更には、その社会全体の興隆も出来ないことになってしまう。

過去三十余年、琵琶界挙げての伝承者養成がなされていない結果が、今日の人材不足を生んでいることを思うと、早急に、修業の場と、将来の展望を立てることが大切なのではないだろうか。

一人の弟子を育てること、十人のお弟子さんを持つ事とは別の道程であつて、琵琶の先生も、本当の意味での、琵琶の師を志してゆかなければ、落語界の如くに伝承者を育て上げる事は、夢のまた夢となつてしまふ、と私は思う。

四月二十五日(日)

副会長 梅原旭濤女史宅

京都琵琶協会恒例笛会の記

玄關先の藤棚に藤波が美しく咲いていて、緑の邸宅での会合はまた楽しい。

二階床の間で棚の骨董が目につき、「大師範」の免状も大きく光つて見える。二時よりテープ鑑賞、木下君操作。

三時半、桜井旭富氏がしんみりと「壇の浦秘曲」。次いで木下皇水氏が「本能寺」を力強く歌い、平井会長「小松の操(第二段)」を美しく演奏された。

五時、旭濤女史心づくしの掘りたての筍料理に、食慾をそそるお弁当がテーブル一杯に賑わつて食事風景となつた。

高橋氏は挨拶についてやぶさみを歌い、旭濤さんは和服正装姿で更に一段と美を見せた。乾盃について各自数々の独特の歌が出され「奥飛弾慕情」で落ちついた。

野賀氏写真撮影に苦心。和気あいあい、話題尽きず七時ごろお開き一同帰途についた。

今回も、旭濤会員高橋、福島、野賀三門下氏のお手伝い、献身的なご奉仕を頂いて、深くお礼申します。

出席者(十二名、順位不同) 平井夫妻、安住、水内、馬場、山岡、桜井、木下、楊、牧、矢吹、梅原会主。

(追記)

十月十六日(土)、十一時より協会秋季大会が京都商工会議所大ホールで開催することが本日決定になった。

(鴨水記)



京都醍醐寺桜祭に琵琶献奏

四月十四日(水)昼京都中島旭穂会が協賛して左記の通り献奏。秋風故郷山一織田徳誠大物の浦一福西旭紅粟津の露一櫛田旭波壇の浦一会主中島旭穂。

京都醍醐寺桜祭に琵琶献奏

四月十八日(日)昼同寺境内特設舞台に於て大阪琵琶同好会の協賛で左記の通り献奏。君ケ代一同小楠公の母一西尾吉野山懐古一朽木赤垣源蔵一寛嶺水河内の宿一玉村旭正那須与市一米田旭恵大楠公一石田旭明一本能寺一小林旭濤一石童丸一中村春海一小栗栖一矢野旭信一小督の局一柴田旭井一姫百合の塔一石橋旭嶺一竜の口一東旭心二〇三高地一奥村旭美一衣川一野々村旭川一舟弁慶一田中敷水。外に剣舞、扇舞、奇術等数番。

芸術琵琶普絃会月例会

四月十八日(日)昼東京豊島区池袋内田ビル二階。城山一杉山富士代湖水渡り一内田隆章一羽衣一鈴木好水一桜狩一丸田弾扇一異国の丘一奈佐喜山一俊寛一坂入俊風一八甲田山一金尾秀水一河内の宿一金森旭彈一井伊大老一反町昇水一茨木一長谷川繡水一八甲田山一杉山旗水一坂崎出羽守一青木早水。六時終了。

筑前琵琶春の定期演奏会

四月二十五日(日)昼福岡市大博多ビル十二階ホール、主催博多旭蝶会、後援県、市教育委

員会ほか。十周年記念演奏会で白魚の詩一飯部あゆみ外二人一川中島一富康平外一人一鉢の木一嶺旭蝶外五人一那須与市一富教代外一人一菅公一青山旭子外三人一立花実山一渡辺宏興外一人、絃旭蝶・江戸南坊流五十川社中一堀尾洋子一白虎隊一渡辺宏興一博多米一丸一梶野優子一新作広田弘毅一青山旭子一野村望東尼一会主嶺旭蝶、青山旭子・笛一・立方四人。

神武館道場発表会

四月二十五日(日)神戸文化大ホール、後援兵庫県・神戸市ほか。第二十六回の催しで関西に於ける斯界第一流の集まりであり独吟連吟剣詩舞等七十二題が研を競い、二十年來本会に協力の三浦蓮水女史は琵琶の演奏で原義人外十一人の立方による「舟弁慶」及び青柳芳枝外九人の立方で「なよたけ物語」をそれぞれ披露し二千の聴衆を完全に魅了した。

日本琵琶悠絃会例会

四月二十九日(日)昼東京中野区大和町地域センター。門琵琶合奏一山崎錦幽、八東一峰一井伊大老一木村栄子一敦盛一峰一八甲田山一橋本草水一城山一杉山富士代一若き敦盛一伴旭友一詩吟一天羽岳水一坂崎出羽守一青木早水一細川ガラシャ一畑嘉水一壽陽江一富士岳鮮一吉野落一中村洲心一石童丸一清水源城一別れの盃一金尾秀水一舟弁慶一長谷

川繡水一宮本武蔵一杉山旗水。以上研修演奏を終り五時五十分散会。(来賓)仲川秀邦、喜多村一城、軽部岳瑞、壬生女史。

日本琵琶協会関西支部の総会

四月二十九日(日)午後二時より日琵琶会関西支部の総会を、大阪駅前東二〇〇米の、本むさしの会館にて行った。

山崎支部長挨拶の後、平井副支部長より、五十六年度の事業報告および収支決算並びに五十七年度事業計画案および予算案を資料に基づいて説明し、全員の承認を得た。又、伊勢谷委員より、五十六年度の収支について鑑査を行った結果、正確であった旨の報告があった。続いて六月五日に催す第五回名流会のプロ等を配布、当日は京阪神の会員は午前九時に会場へ参集するよう決めた。

総会終了後少憩して懇親会を催し、琵琶に勝る?とも劣らぬ隠し芸に飲を尽し、午後六時盛會裡に散会した。当日の参会者は(順不同)山崎旭萃、榎本旭風、高千穂旭楓、伊勢谷安江、小川吟水、中山鳳水、渡島旭鷲、木庭旭山、柴田旭堂、田中旭昇、富樫旭桂、大迫旭山、大野皎月、梅原旭濤、矢吹旭美津、平井春嶺、木下皇水、川上琵琶、楊嶽水の十九名。(いろはにはへと生)

第二十回赤心流春の大会

四月二十九日(日)午前九時半静岡市宮ヶ崎町プリンス会館魚磯。赤心流では毎年春は吟詠